

ハルモニの遺したもの — 済州島キリスト教信者の告白からたどる歴史 —

金 大 勲

I. はじめに

筆者は2018年8月8日、韓国の老人ホームに暮らす筆者の祖母（韓国語でハルモニ）を訪ねた。当初は済州4・3事件¹について訊くのが目的であった。しかしながら、その日、ハルモニを通して済州4・3事件以外の話に出会った。ハルモニは初めて筆者に次のことを告白した。ハルモニは「愚かだ、愚かだった。知らなかったから、知らなかったからしたよ。罪をたくさん犯した。でも、悔い改めた」と語り、続けて「学校で拝んだこと、昔祭祀をしたことも全部悔い改めた」²とふと告白した。

告白に登場する「学校で拝んだこと」とは、日本の植民地支配下の小学校で行われた「宮城遙拝」を示す。ハルモニが「東を向いて拝んだこと」³と表現する「宮城遙拝」は、朝鮮人に対する「皇民化政策」⁴の一つである。しかしながら、当時小学校に通った学生ならば、誰も避けて通れなかったその経験について、ハルモニは「愚かだ、愚かだった」、「悔い改めた」と語り、自分が経験した出来事を振り返った。個人の人生は体験された出来事を抜きにしてはあり得ない⁵というが、長い間ハルモニの心のどこかに存在していたその経験が言葉として、ハルモニの口から出て筆者の耳に入ったのである。

このように、宮城遙拝や祭祀に関わる経験をしたハルモニは、この経験を単に頭の中に置いておかず、自分の口から出した⁶。そして、そこには、自分の経験を悲しみや悔しさで終わらせず、自分の信仰に基づいて、自分の口から出したという具体的な行動がある。そして、その行動は、後述するように、歴史学者の保莉実がアボリジニの人について語る「歴史はそこに常にあって、それを一緒に大切にしている。歴史をメンテナンスしていく」⁷こと、つまり、告白という具体的な行動を通して常に存在した神様を改めて確認するという、ハルモニによって歴史をメンテナンスしていく営みであると考えられる。

同時に、歴史をメンテナンスしていくハルモニの行動の中で、保莉実が指摘した「ほんとうらしさ」⁸という問題にぶつかる。ハルモニにとって、神様はハルモニ

の告白だけではなく、常にあらゆる所に存在している。このような信仰に基づいて語られたハルモニの告白を「ほんとうらしさ」という問題と共に、聞き手の位置からどのように聞くのか、そして、どのように引き受けるのかが問われた。

そして、後述するように、ハルモニの告白に登場する宮城遥拝と祭祀は、歴史年表的な繋がりが見え難い。しかしながら、大門正克が桜林信義さん⁹との聞き取りを通して「桜林さんは、自らの経験を時間軸にそって整理するのではなく、共通項で結びつけて理解していた」¹⁰と指摘したように、時間軸で語られる歴史ではなく、あるつながりや共通項を中心にハルモニの歴史が語られたのである。さらに、大門は聞き取りの中で生まれた沈黙に注目し、それについて、沈黙が破れてから「いま一番重要だと思っている」¹¹ことを「伝えようとしている」¹²と感じ取った。このように、ハルモニの告白が語られる瞬間の直前にハルモニと筆者の間に僅かな沈黙が存在し、その沈黙から一番重要だと思われる要素が筆者に伝わった。それだけではなく、その沈黙は、ハルモニとハルモニが信じる神様との間に行われる静かな対話であったとも考えられる。そして、後述するように、沈黙後に語られたハルモニの告白は「ハルモニ—神様」という関係¹³に基づいた神様に向けての言葉でもあるのだ。

このように、ハルモニによって語りだされた告白には、信仰が染み込んでいる。例えば、明らかに「宮城遥拝」の主体として考えられる日本帝国の姿に対して「やられた」、「仕方がなかった」と語るのではなく、ハルモニの場合は自分の姿を照らし、自ら「愚かだった」、「悔い改めた」という言葉で語った。それは、ハルモニの心の底に存在している信仰、1931年に生まれキリスト教を受け入れた家庭で育ち、現在に至るまで不断に教会に通うハルモニと共に歩んできた信仰が働いたのではないだろうか。だからこそ、ハルモニの告白を受け取るには、信仰ということを考えなければならない。

本稿では、ハルモニにとって自分が経験した出来事を振り返る際に、大きな影響を与える信仰というものを軸として、まず、この信仰の背景になるキリスト教がハルモニの家でどのように形成されてきたのかを聞き取りに基づいて考える。そして、ハルモニの告白に関わる沈黙やキリスト教信者について考察する。続けて告白のプロセスを2018年に「悔い改め」という言葉が語られた「神社参拝80年悔い改め及び3・1運動100周年のため韓国教会1000万人祈り大聖会」（以下、大聖会）と比較しながら、ハルモニの告白に登場する「悔い改め」について検討する。さらに、ハルモニの告白から見えた特別な関係や、歴史を聞く際のほんとうらしさについて考察する。最後に、ハルモニの告白を知るために訪ねた大叔母や祖父への聞き取りを通して、キリスト教信者として振り返る歴史と共に語った言葉について考える。

II. ハルモニと信仰

1931年は満州事変が起こり、それを契機として日本帝国が本格的に軍国主義ファシズム体制に入った¹⁴年である。それだけではなく、前に述べたようにハルモニがキリスト教を受け入れた家庭に生まれた年でもあった。そのハルモニにはきょうだい2人いる。まず、1928年に生まれ済州島の中学校を卒業し、その後に日本へ渡った3歳年上の兄である。その兄は家のなかでは「イルボンハラボジ」¹⁵（図1-C）と呼ばれる。次はハルモニ、そして、最後は1939年に生まれた妹（図1-E）で、キリスト教がどのように家に来たのかということについて語ってくれた人である。

しかしながら、きょうだいは実はこの2人が全員ではなく、イルボンハラボジより先に生まれたものの、生後3か月で亡くなった姉がいる。姉が亡くなったことに加えて、イルボンハラボジが生まれてすぐに病気で死にそうになったことがきっかけとなって、ハルモニの母であるパク・ムセン（図1-B）は教会に通い始め、家族皆がキリスト教信者になったという歴史がある。

1. 奇跡

ハルモニに大きな影響を与えてきたキリスト教がどのように家に来て、信仰が根付いたのかについて訊くために、ハルモニの妹である大叔母に会った¹⁶。

パク・ムセンは前に述べたように最初に娘を産んだが、理由も分からず生後3か月で娘を失った。そして、次に産んだイルボンハラボジも危ない状態になった。すべての話をパク・ムセンから直接聴いた大叔母は筆者に次のように語った。

息子を産んだが湿疹のような浮腫が足に出て、状態がとても悪かったよ。1番上の子も理由も知らずに3か月後死んでしまったのに。息子の足も浮腫のせいで水がだらだら流れているし。この時代には薬はないからね。だから、海に行って塩水で洗うことしかできなかった。だんだん悪くなるから。当時はイエスも信じていないときだし、占ってもらうのが罪だと知らない時代だからうちの母が。占いをするおばあさんが水を取る村に住んでいたと思う。（母が：筆者）1番目の子も失ったし、2番目の子も今腫物が出て悪い状態であると（占いをするおばあさんに：筆者）言ったら、息子を連れてきてと言われた。（占いをするおばあさんが息子の足を見て：筆者）とても難しいと言ったよ。（中略）（占いをするおばあさんが：筆者）クンシン¹⁷を信じなさいって。クンシンって何ですかって言ったら、耶蘇教を信じるって。（中略）子どもは生かすべきでしょう。だから、そのとき、（母が：筆者）決心して教

会に行ったのに違いない。¹⁸

まず、大叔母の話の最後に出てくるクンシンとは「大きい神様」を意味する韓国語であり、それはキリスト教を示してもいる。これに関して2010年に済州島L教会のQ牧師は李在恩との聞き取りを通して次のように語った。

かれら（キリスト教の信者ではない親族：引用者）も神様（キリスト教でいう神様：引用者）がもっと高い位置であることを知っている。しかし、変えたら[改宗すると]自分の信じている神様が怒るから（キリスト教でいう神様を：引用者）信じるができないと思っている。¹⁹（筆者による翻訳）

少し説明を加えると、ここに登場する「自分の信じている神様」とは祖先神を示す。キリスト教でいう神様が他の神様である祖先神よりも「もっと高い」あるいは、クンシンという言葉の意味に含まれているように「大きい」ということは、筆者が子どものときに何度も教会で聴いたものである。このように、キリスト教でいう神様を示す「もっと高い」あるいは「大きい」神様をパク・ムセンは占いをするおばあさんから勧められた。

そして、娘を失い、病気で死んでいく息子を眺める母の心が、大叔母の語った「子どもは生かすべきでしょう」という文章から伝わる。息子を生かしたいという想いが単に悲しい出来事として終わるのではなく、馴染みのないキリスト教を受け入れるという決断を生み出した。そして、奇跡的に、教会に通い始めてから息子の病気が治った。この部分を筆者に淡々と話す大叔母を通して、奇跡に対するキリスト教信者の態度について考えるようになった。

ここで話された「奇跡」は人間の力で不可能であるはずのことが可能になったことであり、その奇跡を大叔母はそのまま受け入れ、筆者に語ったのである。それは、キリスト教の根本には超自然的な要素がある²⁰というアメリカの神学者メイチェンの主張が実際に語られたことである。そして、この要素はパク・ムセンや子どもたちにとって、単に知識として知ることだけではなく、実際に経験したこと、言い換えれば、その奇跡の証拠であるイルボンハラボジの存在と共に生きた歴史がハルモニの家族に遺されている。そして、その経験が家の歴史として90年が経った現在に至るまで語られ、それぞれの信仰の基礎を構成している。

ハルモニが聞き取りの中で「母のお腹にいたときから神様を信じていた」²¹と筆者に言うように、キリスト教は生まれる前からハルモニの一部として存在していたことを聞いた。そして、そのようにキリスト教が始まった家庭で、ハルモニは母や兄と一緒に教会に通い始めた。

しかしながら、教会に通い、キリスト教信者になることには、祭祀を重要な慣習として守ってきた親戚との葛藤が潜在的に残っている。そして、その葛藤は単に親戚との関係の問題ではなく、信仰の葛藤にもつながり、ハルモニの告白に登場した。

2. 家庭

メイチェンは自伝に「私は家で母から聖書と信仰を学びました。家は全ての中で最高の学校でした」²²と書いた。メイチェンが指摘するように、確かに家という所では様々な教育が行われる。言うまでもなく、ハルモニの場合も母であるパク・ムセンのそばで色々なことを見ながら育ってきた。

まず、ハルモニと大叔母が記憶しているように、教会に行く日である日曜日には「畑も行かずに徹底的に教会に行った」²³のである。小さな町では、教会に行く行為自体が目立つことであった時期に、「徹底的に教会に行った」ことは、キリスト教信者というラベルが貼り付けられることでもある。当時キリスト教は西洋の宗教としてさげすまれた²⁴という事実があるにもかかわらず、このような事情を踏まえて「徹底的」に教会に行ったと明らかに語るように、別の道はもう存在していないと考える強い意志が感知できる。

そして、日曜日には「徹底的に教会に行った」ということは、単に「日曜日に教会へまじめに通う」という意味よりも、「日曜日を特別な日として守る」という意味を帯びる。それは、神様に礼拝を捧げる教会を中心に置いて世界を眺めることであり、そこには、キリスト教信者と非キリスト教信者という境界線が引かれ、その事実を日曜日に再確認する。また、日常生活を営む信者にとって、この世の中で自分の人生をどのように生きるべきかという、真の生き方をしだいに知らされた²⁵場としても教会は存在したのである。

このような教会に所属し、教会に通うキリスト教信者になったものの、長い間慣習として続いてきた祭祀という問題がまだ残っていた。例えば、パク・ムセンの場合も、自分はキリスト教信者になったが、長男の嫁であったので祭祀を守らなければならなかった。

しかしながら、あくまでも祖先祭祀を偶像崇拜として認識して禁止するキリスト教の教えのために、結局、パク・ムセンは「祭祀を売る」²⁶ことを決断する。そして、その決断を実現するために、当時日本で働いていた長男から送られたお金を使って、他の親族に祭祀を売ることを決めた。ここで「祭祀を売る」ということは、お金を払うことで、自分が持つ祖先祭祀の義務を放棄し、他の親戚にその義務を移すことを意味する。それは、信仰を守るために行われたパク・ムセンの決断である。そして、その出来事をハルモニは母のそばで眺め、覚えていたの

である。現在、祭祀に関わるその出来事についてハルモニは「売った、売った」²⁷と筆者に語ってくれた。

その歴史を踏まえて、ハルモニの告白に登場する祭祀は、特に「祭祀を売る」まで祭祀に参加してきた自分の行為を示している。それは、キリスト教信者になっても先祖の位牌の前で拝んだ行為である。そして、先祖の位牌の前で拝んだ行為は、ハルモニが「東を向いて拝んだ」と表現する「宮城遙拝」と重なりながら浮かび上がった。小学校と家という異なる場所で行われた宮城遙拝や祭祀が、歴史を振り返るハルモニにとっては何かに向かって「自分の体を動かす行為」という共通点を持っている。そして、それらの行為について、ハルモニは「愚かだった」、「悔い改めた」と語り、ハルモニが語った言葉からハルモニの行為に繋がる信仰という存在が現れる。このように、その行為が信仰で繋がっていることで、小学校の運動場に並んで東を向いて拝むハルモニの姿が、家で先祖の位牌の前で拝むハルモニの姿と共に告白として登場した。それに関して、大門正克は『語る歴史、聞く歴史』に次のように記している。

桜林さんの話は時間や空間を行き来しており、思いつきで話題が移っているように感じるかもしれないが、かれの語る歴史の全体を聞くと、思いつきではなく、あるつながりのなかで話題が移っていることがよくわかった。(中略)桜林さんは、自らの経験を時間軸にそって整理するのではなく、共通項で結びつけて理解していた。²⁸

桜林さんの話を通して大門が感じたこと、つまり、時間軸にそって語られる歴史ではなく、あるつながりや共通項を中心に歴史が語られ、再構成されていく過程を大門は聞いていたと考えられる。そして、大門は続いて「桜林さんは、自らの経験のなかに共通項を見つけて生きる指針にした」²⁹と記した。

このように、筆者がハルモニへの聞き取りを通して見つけたのは、ハルモニが自分の経験を告白する時に語った「宮城遙拝」と「祭祀」には一見すると繋がりが見え難かったが、しかし実はその二つの出来事に共通項が存在しており、それは、ハルモニの信仰に基づいて経験を見るときに現れたのだった。さらに言えば、信仰がハルモニの経験を自分の口から出す媒介として働き、ハルモニの告白に繋がることが分かった。つまり、信仰がなければ、「宮城遙拝」や「祭祀」が共に語られなかったし、その経験が「愚かだった」、「悔い改める」べき行為として登場しなかったのである。

このように、ハルモニの告白を通して、信仰が、ハルモニに「宮城遙拝」や「祭祀」を自身の問題として受け入れさせる媒介となっていることに気づいた。この

点から筆者は、歴史的な時間や場所を超える新たな歴史認識の可能性が広がったと考える。

Ⅲ. ハルモニと告白

ハルモニと告白を考える際に、なぜ、90歳にもなるハルモニが、しかも、ハルモニによると「悔い改める」べきであることを、筆者に告白したのか、それが次に抱いた主な問いである。その問いについて考えるために、再びハルモニの告白を振り返る。

1. 沈黙

前述のとおり、筆者は2018年8月8日から8月9日まで父と共にハルモニを訪問した。当初は1947年3月1日を起点とし、1948年4月3日に発生した騒擾事態及び1954年9月21日まで³⁰続いた済州4・3事件について訊くのが目的であった。しかしながら、ハルモニを通して済州4・3事件以外の話に出会った。それは「宮城遙拝」と「祭祀」の話である。

最初は筆者が訪れた目的通り、計1時間半のうち1時間ほど済州4・3事件に関連する話をした。当時10代後半であったハルモニは憶えていたのである。しかしながら、重くて暗い済州4・3事件の話が続いてその話から少し離れるために、筆者が意図的に話題を変えてハルモニの母であるパク・ムセンについて話をした。

なぜ急にパク・ムセンの話をしたかという、パク・ムセンは家族の中で初めてキリスト教を受け入れ、自分の子孫をキリスト教に導いた人物であるため、ハルモニや筆者の父母に英雄として認識されている。しかも、パク・ムセンの話は家族の中の誰にも楽しみや、喜び、感動を与えることを幼い時から経験していたため、パク・ムセンの話を出した。同時に、数年ぶりにハルモニを訪ねたにもかかわらず、つらかった済州4・3事件の話話を話させたことでハルモニに対する申し訳なさもあった。このような複雑な感情を踏まえて、筆者は済州4・3事件によって現れた空間と心の暗闇とは対照的な明るい処へ移そうとしたのである。そして、確かに雰囲気は変わった。

パク・ムセンをよく知っていた父は「パク・ムセンさんが初めて教会に行きましたよね」と再確認しようとした。しかしながら、ハルモニは「違う」と言って、初めて教会に行った方は「自分の祖父」だと言った。当時、ハルモニは祖父の名前を憶えていなかったが、その人物はキム・サンハク(図1-A)である。ハルモニの答えを通して、新たに意外な人物の存在が浮かび上がった。それで筆者が「い

つキム・サンハクがキリスト教を受け入れたか知っていますか？」と訊いたが、ハルモニはそこまで知らなかった。ただ、町の子どもたちに好かれていた人、そして、よく笑って穏やかな性格を持っていた人だとハルモニは言ってくれた。そして、3人のなかで僅かな沈黙が生まれた。

その沈黙が続くなかで、ある瞬間に、ハルモニはふと告白したのである。さらに言うと、筆者が告白に出会う直前に、明らかに沈黙に出会った瞬間があった。このような沈黙において小原昭さん³¹の話を聞いていた大門が次のように記している。

それから思案しているような沈黙の時間が流れた。(中略) 沈黙を破り、昭さんが満州時代について話し始めたとき、その話は以前にも聞いたのという思いもあった。だが、話を聞いているうちに、昭さんは新聞のインタビューで話せなかったことが心残りであり、いま一番重要だと思っている満州時代と引き揚げについて伝えようとしているのではないかと思うようになった。³²

沈黙後に何かを伝えようとした昭さんから「いま一番重要だ」と思われる要素が感じられたように、沈黙後に語られたハルモニの告白はハルモニの人生にとって一番重要な話として伝わってきた。一番重要だと考える理由は、告白の前に沈黙があったからということに加えて、済州4.3事件の話からパク・ムセンやキム・サンハクの話、そして、宮城遥拝や祭祀の話へと移る過程におけるハルモニの心残りが語られたからである。つまり、筆者とハルモニとの間に生じた沈黙というのは、単に話から少し離れ息をつく時間としてあっただけではなく、心に密に残っていた一番重要だと思える話を発する心の準備でもあったのではないかと考えるようになった。

そして、沈黙というのは一番重要だと思える何かを語る瞬間でもあるが、それだけではなく、キリスト教信者にとっては神様との対話が行われる時間でもあると考えられる。つまり、ハルモニの沈黙というのは単にハルモニと孫という人間と人間の間が生じた静かな時間ではなく、むしろ、ハルモニとハルモニが信じる神様との間に生まれた静かな対話であったとも考えられる。

それは、僅かな沈黙後にハルモニが、「やられた」、「仕方がなかった」と語るのではなく、前述のように、ハルモニの場合は自分の姿を照らし、「愚かだ、愚かだった。知らなかったから、知らなかったからしたよ。罪をたくさん犯した。でも、悔い改めた」と語り、続けて「学校で拝んだこと、昔祭祀をしたことも全部悔い改めた」とふと告白したからである。

そして、その告白には、ハルモニが筆者の祖母であるから、あるいは、韓国人

であるから告白したというよりも、むしろ、「ハルモニ—神様」という関係に基づいた神様に向けての言葉でもあるように、ハルモニが信仰を持つキリスト教信者であるから告白したのである。つまり、ハルモニはキリスト教信者、さらに言うところ「信仰は生を根底から支えるものと信じているし、また支えられて来た」³³ 人として筆者に告白したのである。

2. キリスト教信者

三浦綾子は著書『母』のあとがきに、なぜ小林多喜二の母について本を書いたのか記している。三浦が書いたように、三浦自身は小林多喜二をよく知らないし、共産主義にも疎かったが、三浦の夫が次のように言ったことで彼女は書き始めた。

「多喜二の母は受洗した人だそうだね」ぼつりと言ったその一言が大きかった。共産主義者の母親を書くのならむずかしいかもしれないが、キリスト信者となった人のことなら何とか書けるかもしれない。同じ信仰を持つ私と、生きる視点が同じである筈だからだ。³⁴

キリスト教信者となった人なら同じ信仰を持っていること、そして、同じ信仰³⁵を持つのであれば生きる視点が同じはずだと語る三浦の確信を参照すれば、キリスト教信者なら同じ信仰だと言える、ある共有している信仰が存在している。そして、共有されている信仰には、単に個人の感情に従うことだけではなく、メイチェンが指摘するように「全ての信仰は知的要素 (intellectual element) を伴う」³⁶と考えられる。つまり、キリスト教信者の中には共有されている信仰があり、その信仰には知的要素が存在している。

例えば、ハルモニの告白の場合も「やられた」、「仕方がなかった」と語るのではなく、ハルモニの表現を借りると「愚かだった」「悔い改めた」あるいは、「信仰がよくなるから分かってきたよ。間違ったこと」³⁷という言葉から知的要素、つまり、ある種の知識によって歴史を受け入れたり、その歴史と向き合った自分を判断したりする。そして、ハルモニの告白に大きな影響を与えたと考えられる知的要素には少しずつ積み重なった過程、つまり、教会に通いながら学んだり悟ったりしたその過程が存在し、その過程が重なりながら告白の瞬間を生み出したと考えられる。

むろん、上に述べた「知的要素」はハルモニだけではなく、これから取り上げる「神社参拝80年悔い改め及び3・1運動100周年のため韓国教会1000万人祈り大聖会」(以下、大聖会)に集まった3万人も知的要素を共有している。少し加えると、かれらが持つ個人的な感情だけではなく、知的要素に基づいてかれら

は大聖会に参加したのである。そして、ハルモニが語った「悔い改めた」という知的要素の言葉のように、かれらが持つ知的要素にも「悔い改め」という言葉があり、その悔い改めという言葉を通して歴史がまた問われ、歴史をキリスト教信者の視線を通して再構成していく。

しかしながら、ここで軸として働いているかれらの悔い改めとハルモニの悔い改めは、その悔い改めが語られるまでに至るそれぞれのプロセスを見ると少し差がある。その差から公的な場と私的な場、それぞれ語られた「悔い改め」について考えることができる。

3. 告白のプロセス

大聖会は、2018年10月28日にソウルの光化門ロータリーで韓国教会1000万人祈り運動本部によって行われた。途中から雨が降っていた悪天候にもかかわらず、3万人が集まって「悔い改め」の祈りをした。むろん、大聖会に参加した人びとは神社参拝には直接的には参加していない人びとであるにもかかわらず、大聖会まで来て「悔い改め」の祈りをしにきたのである。

3万人が大聖会に集まって祈ったが、それは、ちょうど80年前の1938年9月10日に第29回朝鮮耶蘇教長老会の総会で行われた神社参拝決議声明に関わる。その総会において神社は宗教ではないこと、そして神社参拝が愛国的な国家儀式であることが発表され、現在韓国のキリスト教教会に、拭えない罪³⁸として残っている。そして、拭えない罪はキリスト教信者が歴史を振り返るとき、単なる過去の出来事として取り上げられるだけではなく、「悔い改める」べき歴史としてよみがえってくる。このように大聖会もハルモニの告白もそれぞれ「悔い改め」という言葉を使っているが、大聖会とハルモニの間には少し異なる点があるのではないかと考える。

まず、悔い改めという言葉が生み出された経緯について考える。ハルモニは自分がやった行動について、例えば、東を向いて拝んだことや祖先の位牌に拝んだことを、当時は間違っただことだとは思わなかった。むしろ、まじめな学生や娘としては、まじめに拝むことが正しいことであると考えた。しかしながら、ハルモニの言葉を借りて表現すると、ハルモニは「(東を向いて拝んだことが：筆者)間違っただこと。信仰がよくなるから分かってきたよ。間違っただこと」³⁹と語り、悔い改めをしたのである。

一方で、大聖会で語られる悔い改めというのは、牧師によって決められた神社参拝決議について、もちろん自発的に決意したとは言えないものの、自分がやる行動が間違っただことを十分に分かっていたにもかかわらず、やるしかなかった、あるいは、やる選択肢を選んだ自分たちの決断について悔い改めをしている。

このように、ハルモニにとって最初は間違いだとは思わなかった行動が実際に間違った行動であることを後で気づき、語られた悔い改めと、間違ったことであると十分に分かっていたが、神社参拝決議をしてしまった行動について語られた悔い改めは、同じ言葉であるものの、言葉が生まれる経緯をみると、異なる行動に対する悔い改めであることが分かるようになった。

また、悔い改めという言葉が形成されるプロセスについて考えると、大聖会の場合はソウルの光化門ロータリーという決まった場所・決まった時間に人びとが来た。そして、事前に作成されたプログラムに従う。神社参拝を悔い改める祈りをするまでのプログラムを見てみると、最初は牧師たちが大きな十字架を背負って約100メートルを歩いて舞台まで行く。それが終わってから主題映像が流される。映像の最初には聖書の一つの書である出エジプト(20:4~6)⁴⁰の御言葉⁴¹が画面に流される。そして、続けて日韓併合が国恥日として、また、1938年に行われた神社参拝決意が霊的な国恥日として説明され、最後にこの大聖会の趣旨が説明される。

約3分間のこの映像は、大聖会に参加する人びとに歴史に触れる機会を与えると同時に、悔い改めることの必要性をアピールしている。特に、最初に流された出エジプトの御言葉で「偶像を造ってはならない」こと「それら(偶像:引用者)を拝んではならない」こと、「父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし」たことは、神社参拝をした歴史を持つ人びとにとって、あまりにも印象に残る御言葉である。そこには、続けて「わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである」ことが書かれているものの、「悔い改め」という明らかな目的を持っている人びとの目には入りにくいだろう。

そして、映像を見て、大会の開会辞や趣旨宣言のプログラム終了後、大盛會大会長ユン・ボファン牧師が5分ほどの短いメッセージを伝え、讚美歌を歌ってから、「悔い改め」の祈りが始まる。映像やメッセージを聴いた一人ひとは「悔い改め」の祈りを捧げるが、3分ほどの時間、それぞれが持っている信仰が各自の中で言葉として語られ、決められた流れの中である空間を形成した。

一方で、ハルモニの告白は前に述べたように、筆者がハルモニに会った根本的な理由はハルモニの済州4・3事件の経験を訊くためであり、その前に行われた植民地支配の経験ではなかった。しかしながら、ハルモニは「ふと」宮城遥拝の経験と共に祭祀の経験を告白し、筆者がハルモニとの出会いを通して求めていることが聞こえたことである。

それは、筆者がハルモニを訪ねて、思わず出てきたハルモニの告白、そして、その告白が語られる瞬間に今までのものとは重なりながらも変わっていく空間、つまり、新しい「空間」が形成された。

ここで筆者が記す「空間」というのはハルモニが生きてきた歴史を指しており、その「空間」に現れた信仰を抜きにしてハルモニの歴史を語ることはできない。むしろ、ハルモニだけではなく、大聖会の3万人もそれぞれに信仰を持っており、ある空間を形成した。このように、信仰が「悔い改め」という言葉によって語られ、空間が形成された点は一見共通するものの、ハルモニの告白によって形成された「空間」には自身の記憶が明確に存在している。つまり、「東を向いて拝んだ」自らの経験が自身による悔い改めの言葉で語られるという、実際に経験したハルモニの記憶が言葉として生み出され「空間」を形成している。

4. 関係

ハルモニが告白したその日、筆者は研究者としてではなく、孫としてその場にいた。そして、ハルモニも「孫だから話しているよ」⁴²と話すように、ハルモニから見ると、孫である筆者がいる。このように、お互いに「ハルモニ-孫」という特別な関係、言い換えれば、家族という事実がお互いを結び合わせていると言えるだろう。そして、ハルモニの話を書くことは、鶴見俊輔が記したように、聞くということは「人との関係において生きる」⁴³ことだという側面から考えてみると、ハルモニの告白には「ハルモニ-孫」という「関係」が前提として置かれ、確かにハルモニは孫である筆者だから話をしたと考えることができる。つまり、ハルモニが告白したその場に筆者がいなかったとしたら、換言すれば、ハルモニの言葉を聞く人がいなかったとしたら、ハルモニの告白は成立しなかったと考える。

しかしながら、「ハルモニ-孫」という関係だけではなく、他の関係に気づき、むしろ、その関係があるからこそ、ハルモニの告白が成立したと考えるようになった。それは、ハルモニが生まれてから現在に至るまで教会に通いながら積み重ねてきたハルモニと見えない神様という存在との関係である。その関係は、筆者が幼いときから聞き続けてきたハルモニの歌う讃美歌や主の祈りという形で現れ、未だにハルモニを訪ねるときに、必ず教会はちゃんと行っているか、祈りはちゃんとしているかという質問が普通になされることの前提になる「ハルモニ-神様」という関係である。

その関係に即して考えると、ハルモニの告白は、ハルモニと神様との関係から生まれた話なのではないだろうか。つまり、告白というのは、歴史を振り返るハルモニが神様に対して自分の経験を口から出した瞬間であり、その話が孫である筆者に「聞こえた」のではないかと考えることもできるだろう。それは、普段「母のお腹にいたときから神様を信じた」と語るハルモニが、神様以外のものに拝んでしまった自分を見つけ、そのような自分の姿を神様に語るという行動があると

考えた。

そのような行動を考える際に、特に、「悔い改め」という言葉が浮かび上がる。予期せず語られた「悔い改め」は、単に孫である筆者に何かを教えようとする動きではなく、経験に即した自分の話を聞いている神様に語った言葉であること、つまり、自分の感情や考えを神様に告げる証であると考えられる。さらに言うと、ハルモニの告白は、ハルモニの信仰において基礎となる神の存在を意識すること、言い換えれば、神の存在を信じるハルモニだからこそ、「悔い改め」と言うことができたのである。それについて三浦綾子の文章から考えてみよう。

わたしはしかし、神に不平を言うてはいても、決して神を信じていないのでなかった。神はこの世にいないと思っているのではなかった。その証拠に、わたしは神に向かって抗議をつづけていたのだから。⁴⁴

三浦綾子が「不平」を考える際、神という存在を抜きにしては成り立たないように、筆者にとってハルモニの告白も、その場所にいた筆者や父に向かって語られたというより、ハルモニが信じる神に向かって告白されたものであると思われる。

このように、ハルモニの告白には複数の関係が絡み合い、その関係がハルモニの告白を支えている。そこには、繰り返すがハルモニにとっては見えないが存在している関係が重要であるため、悔い改めという言葉が語られていると考えられる。そして、ハルモニにとって神様が自分の言葉を聞くという「信仰」が登場する。言い換えれば、ハルモニの告白は、関係に即して考えると、ハルモニの信仰が歴史に触れ合う瞬間であり、その瞬間に神様の存在がいること、そして、ハルモニがキリスト教信者として生きた痕跡が言葉として表れた瞬間である。

5. ほんとしさ

冒頭でも述べたように、宮城遙拝や祭祀に関わる経験をしたハルモニは、この経験を単に頭の中に置いておかず、この経験を他者に向けて自分の口から出した。それについて考える際に、例えば、オーストラリアの先住民であるアボリジニの人の交流から歴史を考えた保莉実は『ラディカル・オーラル・ヒストリー』に次のように記したことが手がかりとなる。

僕（保莉：引用者）が訪問滞在したダグラグ村で行われていたことは、（中略）歴史はそこに常にあって、それを一緒に大切にしている。みんなで歴史をメンテナンスしていく。そういう歴史実践のあり方だったんですね。⁴⁵

歴史はそこに常にあったと言える感覚、そして、歴史をメンテナンスしていくことから現れる歴史実践はアボリジニの人だけではなく、ハルモニの告白からも考えることができるだろう。まず、見えないが存在する神様はハルモニの告白と共に絡んでくるが、ハルモニにとって、その神様は告白だけではなく、あらゆる所にも存在している。その感覚から再びハルモニの告白を考えると、告白という行為はハルモニが経験した歴史をメンテナンスしていくこと、つまり、告白を通して神様の存在を改めて確認する営みである。

自分の経験を悲しみや悔しさで終わらせるのではなく、自分の信仰に基づいて、実際に自分の口から話し、それが、ハルモニにとって神様の存在を改めて確認する営みであることを気づいたとき、ハルモニの歴史をどのように考えるのが筆者に問われている。この問いについて保莉は次のように記している。

超自然的現象を信じてはいけない、という現代主義の、アカデミズムの、世俗主義の要請が、実際に現地で経験・実感した（はずの）「ほんとうらしさ」を無理やりに否認してはいないでしょうか。⁴⁶

前に述べたように、イルボンハラボジの病気が治るという超自然的現象と深く関わる話、そして、ハルモニの告白に深く関わる神様という存在についてある程度尊重するが、それだけではただキリスト教信者の歴史として受け入れて終わるのではないかと考える。つまり、ここで問われるのは、ある家族がキリスト教信者となる理由として超自然的現象やハルモニの告白に決定的な影響を与えた神様の存在を主張する際に、その歴史をどのように引き受け、記述していくのかということである。

この問いと共に、例えば、ハルモニの告白に出会った日、語られたハルモニの言葉だけではなく、かすかな光がハルモニを照らすように感じたことがある。ハルモニの体を包んだようなその光は確かにハルモニと筆者の対話に登場した。これに対して保莉が次のように記したことが想起される。

最初に、歴史を語るとかいう前に、まずは大地の声を聞けないといけない。大地があなたにいろんなことを教えてくれるわけです。そんなことを言われたって、僕（保莉さん：引用者）には聞こえないわけですよ。でもかれら（アボリジニの人：引用者）は大地の声を聴くわけですよ。その大地の声に従って、たとえば、「あそこで白人が死んだのは、法を犯したあの白人に大地が懲罰を与えたからだ」と語りますよね。そのときに、僕らはどのようにしてこのアボリジニの人が語ってくれた歴史物語を聞くのでしょうか？⁴⁷

ここから、聞き手として、話し手が持つ信仰や考えを知らなければならないこと、そして、尊重する態度が大事であると読み取った。しかしながら、歴史の書き手である保莉が、もしも本当に大地の声を聴いたとき、かれはどのようにしてこのアボリジニの人が語ってくれた歴史物語を聞き、書いたのかという問いが同時に浮かび上がる。

それは、歴史を書く筆者にとって、ハルモニとの聞き取りの中で「光を感じた」という出来事を、どのように扱えば良いのだろうかという問題と重なる。目で確認できない存在や出来事—奇跡、神様などを研究者が感じた際に、それらが説明できないことや、分析できないことであると感じたとき、証拠が必要な論文にどのように書き込むことができるだろうか。この経験はただありえない経験で終わるのか、それとも、本当に見えない何かを含めて歴史を書くのが、ハルモニの告白に出会った聞き手に問われる。

IV. 他のキリスト教信者

ハルモニの告白について知るために、ハルモニの周辺を埋めていく作業をするなかで、ハルモニの妹である大叔母（図1-E）やハルモニの夫である祖父（図1-D）に会った。かれらの話を聴きながら、ハルモニが宮城遥拝や祭祀について「悔い改め」と信仰に基づいた告白を語ったように、大叔母や祖父からも重なる話が聞こえた。

まず、筆者は大叔母に会ってハルモニから参拝の話を聴いたことを伝え、大叔母にハルモニから参拝の話を聴いたことがあるのか訊いてみた。そうすると、大叔母は「そのときは学生たちが毎日拝んだよ。ハルモニは日帝時代に学校に通ったんでしょ」と語り、そのあと、20秒ほどの長い沈黙が続いた。そして次のように語ってくれた。

確かに神様は、聖書にもこのような御言葉があるでしょう。大変なことがきたら喜ぶことにする⁴⁸と書かれているよね。しかし、大変なことがきたとき、何が喜ばしい？喜ばしいより悲しい。ところが、そのあときっといいことが生じてくる。われわれの母（パク・ムセン：筆者）も子どもが死んで、われわれの兄も危なくなつて、悲しくて大変なことがきたが、これらを通してイエス様を信じることになったからね。だから、大変なことがきたとしても全部悪いことではないよね。⁴⁹

大叔母が引用した「大変なことがきたら喜ぶことにする」こと、明確にいうと

「さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい」⁵⁰という聖書の御言葉は筆者も何回も聴いたことがある。しかしながら、大叔母がハルモニの参拝の話をきっかけに歴史を振り返るとき、大叔母が持っている信仰というものが御言葉を通して現れてきた。そして、大叔母が自らの経験や母から聴いた話を振り返るときに現れてくる信仰は、宮城遥拝や祭祀を告白したハルモニの信仰と重なって見えてくる。さらに言うと、ハルモニや大叔母が歴史を振り返るとき、そのなかには信仰というものが存在する。つまり、信仰が歴史に入ってきたと言えるだろう。

そして、大叔母に会った二日後に祖父に会った。最初は濟州4・3事件の話から始まった。濟州4・3事件が起きたときに、祖父の父親の弟家族が殺された話が終わったあと、祖父の家族がどのようにキリスト教を受け入れたかという話が出てきた。

わたし（祖父：筆者）は、わたしの家族は兄が3人、姉が2人いた。それが、5人が亡くなったの。一番目の息子が生まれて3、4歳になったら死んでしまった。それが、二番目の息子も死んでしまった。3番目の姉⁵¹も死んでしまった。4番目の息子も死んでしまった。5番目の姉も死んでしまった。だから、2、3歳になったら、当時はおかしい病気で（亡くなる：筆者）。だから、病気になったらクッ⁵²をするの。そして、亡くなったらクッする。だから、全部で（クッを：筆者）10回した。（中略）だから、（先に教会に通い始めた親戚が：筆者）お父さんの家に来て息子や娘を治すためにクッしても亡くなるから。イエス信じるって。それで、イエスを信じることになった。

偶然なのか奇跡なのか、祖父の家族が教会に通い始めてからは、子どもたちが死ななかった。そして、以下の内容はどのようにキリスト教を受け入れたのかに関する話が終わる前に祖父が言ったことである。

わたし（祖父：筆者）が3歳。わたしが3歳で、姉が6歳のときイエスを信じた。それ以降はうちの姉も生きたし、わたしも死ななかったし、クムザ（祖父の妹の名前：筆者）も死なない、スンザ（祖父の妹の名前：筆者）も死なない、メンザ（祖父の妹の名前：筆者）も死なない。次に生まれたのが5人じゃない。5人。だから、5人は死んで5人は生きたね。そして、もし、（死んだ：筆者）5人が全部生きていたとしたら、4・3事件に当たる人びとでしょう。6. 25⁵³のとき軍に召集されて軍人になったし、4・3事件のとき、山に行って暴徒⁵⁴になったし。それだったら、彼ら（亡くなったきょうだい）

筆者) のせいで、お父さんも殺され、母も殺されることになったし。だから、神様があらかじめ全部呼んでくれたよ。⁵⁵

前述のように、済州4・3事件に祖父の父親の弟家族が、祖父が暴徒と呼ぶ人びとが隠れた山に登った一人の息子のせいで、子ども以外は家族皆が殺されたことを祖父は目撃した。そのような祖父にとって、もしも先に亡くなった祖父の5人の兄弟が死なずに生きてきたとしたら、父親の弟家族のように殺されただろうと予測するのは想像に難くないと考えることができる。

ただし、ここで、注目したいのは、この問題に直面した祖父が最後に語った「だから、神様があらかじめ全部呼んでくれたよ」という発言であり、理由も分からず亡くなった5人の兄弟に対して、神様があらかじめ全部呼んでくれたと語る祖父に、信仰というものが働いた点である。そして、祖父が済州4・3事件やキリスト教を受け入れた経緯を振り返る際に、その経験を単に頭の中に置いておかず、信仰を通して死に関わる経験を解釈し、実際にこの経験を誰かに向けて自分の口から言葉にして語ったのである。

このように、前に述べたハルモニの告白や、大叔母が引用した聖書の御言葉、そして、死に関わる祖父の認識には、信仰が存在している。そして、信仰に基づいて歴史を振り返るかれらの言葉について、次のようなメイチェンの視点から考えることができる。

メイチェンは、ベッカー⁵⁶ (Carl L. Becker) や当時の多くのアメリカ人の見方を否定することさえしたが、その見方というのは、事実（またはベッカーの意味での出来事）は、さまざまな解釈に適切に開かれており、その解釈は時代、場所、観点に関連することで有効となっている。（しかしながら：引用者）、メイチェンにとって、出来事は内在的に固定された重要性を持つと考えられている。（中略）われわれが歴史的解釈で行うことは、真の事実とその重要性を発見（discover）しようとすることである。⁵⁷（筆者による翻訳）

信仰に基づいて歴史を振り返ったハルモニ、大叔母、祖父にとって、歴史というのは見えない神様という存在を訪れる行為である。それは、メイチェンが出来事について考える視点、さらに言うと、内在的に固定されたある重要性、つまり、ある出来事にはそもそも神様の計画による重要性が込められていることを、ハルモニ、大叔母、祖父自身が発見した（discover）瞬間である。言い換えれば、歴史を振り返るかれらが、見えない神様という存在を感じ、その事実から重要性を発見し、それを筆者に言葉として語る瞬間である。そして、そこには、信仰を持

つかれらが、キリスト教信者として、アボリジニの人のように「一緒に大切に」しながら、筆者に言葉として語り、歴史をメンテナンスしてきた姿が見えてくる。

V. おわりに

先述のとおり、アボリジニの世界観に取り組んだ保莉は「最初に、歴史を語るとかいう前に、まずは大地の声を聞けないといけない。大地があなたにいろんなことを教えてくれるわけです」⁵⁸と記した。宮城遥拝や祭祀に関わる過去の出来事についてハルモニは告白という形で語り、そこには、アメリカから渡ってきたキリスト教が濟州島まで届き、そのキリスト教を受け入れたという家族の歴史がある。そして、その家族の一員として生まれたハルモニにとって、キリスト教は単なる西洋の宗教ではなく、ハルモニの人生と密接に関わる。

例えば、ハルモニにとってキリスト教は『塩狩峠』の主人公である永野信夫が「何だか日本人のくせに、西洋人のまねをして、アーメンなどと、他国の言葉を使ったり、イエスとかいう外国人を神様だなどと信じているのは、どうにも虫が好かないのです」⁵⁹と語るように、単に儀礼として見られる西洋の宗教ではなく、むしろ、歴史を振り返る過程において、ハルモニ自身を歴史の主体として認識させ、植民地支配の記憶を「ハルモニ—神様」との関係から想起させるようなものとして存在してきた。

このように、筆者は本稿を通して、生まれてから現在に至るまでキリスト教信者として生きてきたハルモニに焦点を当てた。そして、アボリジニにとって大地が存在したように、ハルモニにとって神様が存在したこと、さらに、そこには信仰というものがハルモニの告白と絡んできたことに注目した。つまり、信仰という媒介がハルモニの振り返る歴史に存在しなければ、ハルモニの告白はハルモニの歴史とはならないのだ。

そして、その信仰は、ハルモニのようにキリスト教の家庭で生まれた筆者に、三浦綾子が『道ありき』で書いた「信仰とは、望んでいる事がらを確認し、まだ見ていない事実を確認することである」という聖書の御言葉⁶⁰を想起させる。宮城遥拝や祭祀に関わる過去の出来事に対して、「望んでいる事がら」を悔い改めという御言葉で確信するハルモニの姿は、筆者にハルモニの信仰が依然として存在していたことを気づかせた。そして、ハルモニがそのような信仰を持って生きて来たという事実と出会った筆者にとって、今回の告白を通して何が見えたのかを考えるプロセスは、ハルモニの遺したものを探るプロセスでもあると考える。

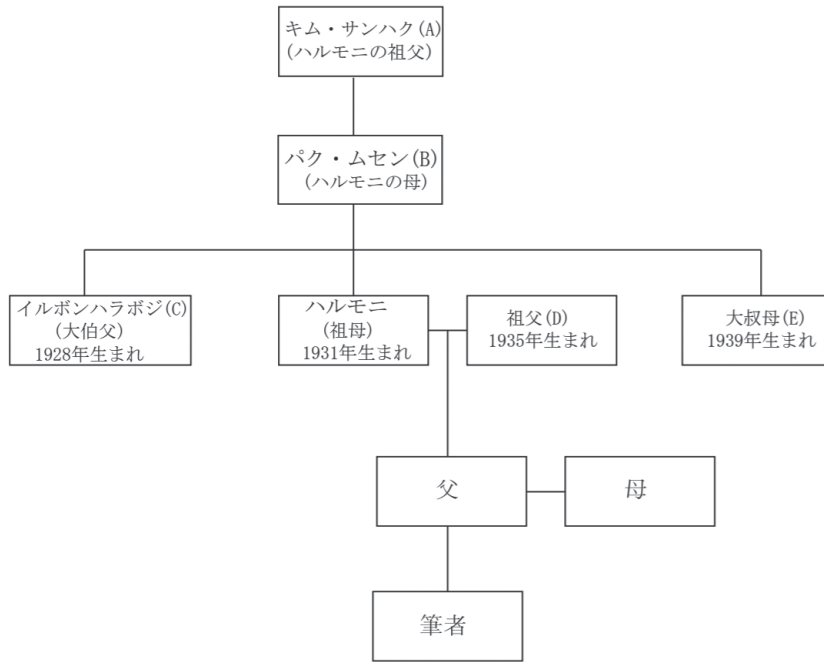


図1 筆者の父方の家系図

注

- 1 1947年3月1日を起点とし、1948年4月3日に発生した騒擾事態及び1954年9月21日まで済州道で発生した武力衝突と鎮圧過程において住民が犠牲になった事件をいう。済州4・3事件真相究明及び犠牲者名誉回復委員会『済州4・3事件真相調査報告書<日本語版>』（済州4・3 平和財団，2014），584.
- 2 ハルモニへの聞き取り（2018年8月8日 韓国鎮安郡バンウォルノインサランの家（老人ホーム）にて実施）.
- 3 ハルモニへの聞き取り（2019年6月6日 韓国鎮安郡バンウォルノインサランの家（老人ホーム）にて実施）.
- 4 宮田節子の説明によれば、一般に朝鮮人を「皇国臣民」化するための、様々な政策の総称と理解されている。つまり、神社参拝、宮城遥拝、国旗掲揚、「皇国臣民誓詞」の斉唱、君が代の普及、日本語普及、志願兵制度の実施、第三次教育令の改正、創氏改名等々である。宮田節子「皇民化政策の構造」朝鮮史研究会『朝鮮史研究会論文集』29（1991），44.
- 5 朴沙羅『家の歴史を書く』（筑摩書房，2018），32.
- 6 本稿では「自分の口から出した」という表現が多用している。それは、ハルモニにとって話さなくてもよい話を、ハルモニが自らの選択によって誰かに語ったということを強調するためである。
- 7 保莉実『ラディカル・オーラル・ヒストリー』（御茶ノ水書房，2004），19.
- 8 Ibid., 35.
- 9 桜林信義（1915年生まれ）は、1990年に大門正克が1920年代から1930年代前半にかけて山梨県落合村の農民運動について聞き取りをした人である。
- 10 大門正克『語る歴史、聞く歴史』（岩波新書，2017），148.
- 11 Ibid., 167.
- 12 Ibid.
- 13 ハルモニ―神様の関係を考える際に、三浦綾子の『塩狩峠』を参考にする。この小説では、路上にキリスト教の伝道師が登場する場面があるが、この人物は「愛とは、自分の最も大事なものを人にやってしまうことでもあります。最も大事なものは何でありますか。それは命ではありませんか。このイエス・キリストは、自分の命を吾々に下さったのであります」と叫ぶ（318頁）。叫ばれたこの言葉の中で「命を吾々に下さった」ことを信じるハルモニにとって「ハルモニ―神様」は、神の命によってなされた救いというギフトをもらう資格がないと考える自分に、救いというギフトを下さり、そのギフトをハルモニが受け入れることで結ばれた「関係」と考えられる。
- 14 오성철『식민지 초등교육의 형성』교육과학사，2000년，1쪽（呉成哲『植民地初等教育の形成』（教育科学社，2000），1）.
- 15 韓国語で「日本のおじいさん」を意味する。
- 16 大叔母への聞き取り（2019年5月24日，韓国済州市済州永楽教会1階カフェにて実施）.
- 17 韓国語で「大きい神様」の意味。ここで、大きい神様はキリスト教の神様を示す。
- 18 大叔母への聞き取り（2019年5月24日，韓国済州市済州永楽教会1階カフェにて実施）.
- 19 이재은「제주도의 조상제사와 기독교」한남대학교 대학원석사학위논문，2011년，24쪽（李在恩「済州島の祖先祭祀とキリスト教」（碩士論文，韓南大学校大学院，2011），24）.
- 20 Stephen J. Nichols, *J. Gresham Machen: A Guided Tour of His Life and Thought*, (P & R Publishing, 2004), 89.
- 21 ハルモニへの聞き取り（2018年8月8日 韓国鎮安郡バンウォルノインサランの家（老人ホーム）にて実施）.
- 22 J. Gresham Machen, *Christianity in Conflict*, (CrossReach Publications, 2016) .
- 23 大叔母への聞き取り（2019年5月24日，韓国済州市済州永楽教会1階カフェにて実施）.
- 24 조남수『조남수목사회고록』선경도서출판사，1987년，72쪽（趙南洙『趙南洙牧師回顧録』

- (善瓊図書出版社, 1987), 72).
- 25 三浦綾子『ひかりと愛といのち』(岩波書店, 1998), 83.
- 26 ハルモニへの聞き取り(2019年6月6日 韓国鎮安郡バンウォルノインサランの家(老人ホーム)にて実施).
- 27 ハルモニへの聞き取り(2018年8月8日 韓国鎮安郡バンウォルノインサランの家(老人ホーム)にて実施).
- 28 大門, 148-149.
- 29 大門, 149.
- 30 済州4・3事件真相究明及び犠牲者名誉回復委員会, 584.
- 31 小原昭(1927年生まれ)は、2003年に大門正克が岩手県和賀町(現北上市)の女性たちの生活記録を調べる際に聞き取りをした人である。
- 32 大門, 167.
- 33 神谷美恵子『生きがいについて』(みすず書房, 2004), 237.
- 34 三浦綾子『母』(角川書店, 1992), 206.
- 35 同じ信仰であると言っても、それが同じプロテスタント教団の中にも激しい対立は存在する。実際、韓国の長老会統合教団においてもミョンソン教会の父子世襲(2019年)について激しい対立があった。しかしながら、対立の原因は信仰が異なるというより、この信仰を持つ人間による対立が原因として考えられる。さらに言うと、信仰の基になる「イエス様によって救われた」、「天国は存在する」ことから対立が発生するというよりは、三浦綾子の『氷点』が取り扱った「人間の原罪」という問題を背負って生きていく人間によって激しい対立が発生すると考えられる。
- 36 Stephen J. Nichols, *J. Gresham Machen: A Guided Tour of His Life and Thought*, 105.
- 37 ハルモニへの聞き取り(2019年6月6日 韓国鎮安郡バンウォルノインサランの家(老人ホーム)にて実施).
- 38 천지우 「신사참배 앞장, 씻을 수 없는 죄, 기감 서울연회, 77년만에 회개」『국민일보』2013년 1월 9일 (チョン・ジウ「神社参拝先頭、拭えない罪、基督教大韓メソジスト会ソウル年会、77年ぶりに悔い改め」『国民日報』(2013年1月9日)) <http://news.kmib.co.kr/article/view.asp?arcid=0007059722> (最終閲覧日2020年9月22日).
- 39 ハルモニへの聞き取り(2019年6月6日 韓国鎮安郡バンウォルノインサランの家(老人ホーム)にて実施).
- 40 (4) あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはならない。(5) それらを拜んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、(6) わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。(『出エジプト20:4~6』新改訳).
- 41 聖書の言葉として、例えば、本稿に書かれた「信仰とは、望んでいる事がらを確認し、まだ見えない事実を確認することである」のように聖句を用いる場合、「御言葉」と記す。
- 42 ハルモニへの聞き取り(2019年6月6日 韓国鎮安郡バンウォルノインサランの家(老人ホーム)にて実施).
- 43 鶴見俊輔「ききがきについて」『思想の科学』111(1979年10月), 89.
- 44 三浦綾子『道ありき(青春篇)』(新潮社, 1980), 285.
- 45 保莉, 19.
- 46 Ibid., 35.
- 47 Ibid., 13.
- 48 筆者の大叔母が引用した聖書の御言葉は「私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい」(『ヤコブの手紙1:2』新改訳)である。
- 49 大叔母への聞き取り(2019年5月24日, 韓国済州市済州永楽教会1階カフェにて実施).

- 50 『ヤコブの手紙1：2』新改訳。
- 51 娘のこと。祖父は娘を「姉」と呼ぶのでそのまま表記した。
- 52 巫女によって執り行なわれる祭儀を示す。特に、祖父は語るクツは家庭において、生死、疾病、生業、季節などを司る神々を召喚して祈る「家祭」である。済州観光公社 https://www.visitjeju.net/jp/jejuStory/culture?tap=two&menuId=DOM_000002022003000002 (最終閲覧日2020年9月22日) を参照。
- 53 朝鮮戦争を示す。
- 54 南朝鮮労働党員や党員に誘われて山に行った人びとを済州島住民が呼ぶときに使った言葉。南朝鮮労働党は韓国で形成された共産主義政党であり、済州島4.3事件が起こる原因に深く関連している。
- 55 祖父への聞き取り (2019年5月26日 韓国済州市祖父の家にて)。
- 56 実用主義者であるアメリカの歴史学者。1930年頃に現代な見方を代弁する学者として知られた。代表作として『Everyman His Own Historian (1931)』、『The Heavenly City of the Eighteenth-Century Philosophers (1932)』がある。(*Understanding Fundamentalism and Evangelicalism* を参照した)。
- 57 George M. Marsden, *Understanding Fundamentalism and Evangelicalism*, (Michigan, Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1990) , 191.
- 58 保莉実, 13.
- 59 三浦綾子『塩狩峠』(新潮文庫, 1973), 208-209.
- 60 三浦, 『道ありき (青春篇)』, 342.

Abstract

My grandmother's story: Thinking about history through the lens of faith

Kim Daehoon

I visited my grandmother in order to ask about the Jeju Massacre, also known as the 4.3 Incident. However, I unexpectedly encountered her confession about having to perform worship towards a Japanese royal palace during her elementary school years under Japanese colonization as well as her participation in ancestor worship ceremonies in her house. From the confession, I noticed the faith that she has was inevitably working through her mind as she looked back at her past. From that incident, I changed my original question from what I want to know about the Jeju Massacre to what has been revealed to me about the faith that my grandmother leaves behind.

In order to understand my grandmother's confession spoken based on her faith, I first researched about how the Christianity that influenced her faith came into her family. In order to know that, not only did I examine the books written by the pastors in Jeju but I also interviewed my grandmother and her younger sister. I also delved into her experience with her mother about how they keep their faith as a Christian in front of ancestor worship.

As I wrote about my grandmother's confession, firstly, I noticed the silence existed between my grandmother and me just right before her confession and I examined the meaning of the silence that she showed during the interview. And secondly, I focused on being a Christian and examined what it means to be a Christian when she was looking back at her past. Thirdly, I analyzed the private space in which my grandmother shared her confession with the public Christian assembly held in Korea in 2018 where Koreans confessed their Shinto shrine worship. Fourthly, I delved into the relationship between my grandmother and me and examined the meaning of the relationship that has connected my grandmother and me as a family. Lastly, I focused on what is the definition of the reality of history and tried to demonstrate how far history can contain stories related to faith. I also added more stories shared by her younger sister

and her husband which showed how faith influenced the way they see history.

In conclusion, my grandmother's confession about performing worship towards a Japanese royal palace during her elementary school years under Japanese colonization as well as her participation in ancestor worship revealed to me her faith in Christianity. This faith influenced not only her view of history but also asked how far history can contain the stories by my grandmother as well as the stories of her younger sister and her husband.